

庭園遺跡の調査と研究経過

旧一乗院庭園遺跡の復原的考察

1、調査の経緯

奈良市壹大路に面して建つ奈良県厅と奈良地方裁判所の敷地が、興福寺旧境内で最も重要な大乗院判所の敷地である。そのうちでも旧一乗院跡の住房跡であることは周知の通りである。そのうちでも旧一乗院の屋敷其他の建物を含む敷地が、明治9年奈良地方裁判所に移管され、その後幾棟かの建増しあつたが、旧い建物をひどく

改築することなく、昔のままに利用して來たので、割合よく今日まで残つたのである。そして宸殿、殿上、御支闇など一連の建築群が、創造された時ままでの位置に、今日に及んでることは、近世公家住宅文化の貴重な資料であるだけでなく、寝殿造系建築の研究上最も貴重な意義がある(第1図)。従つて現況のまま保存すべきか、移築して保存すべきかの論議が聞わされて來たのである。遺跡庭園室では、数年前から一乗院関係の古文書や指図の類を蒐集していった。そこで今日まで判明した一乗院庭園の略史をのべよう。

2、旧一乗院庭園の略史

一乗院に関する図を参考にしつつ、地形測量によつて得た資料に基いて宸殿背面に池があつたことを一応推定し得たが、記録の方ではこの池庭のことはあまり問題にされていなかつた。

古図には宸殿の背面に東南隅ぬ西書院から、細長い池水面が斜に描かれて来たとなると、それは唐門の東か西かどちらからかといふことになるし、宸殿の背後に園池があつたとする。その池の形状や、水辺の勾配などを知りたいので、これらについては最近行つた電気抵抗法による復原的考察法を加味することとした。

第一乗院宸殿
第一乗院
この図は、第一乗院宸殿の西北隅にづついている渡廊の下をくぐり抜けて、西北に向う水路と、もう一つ、廊が書院より約58尺のところで直角に曲り、南北に通つてゐるが、その渡廊のほぼ中央部の廊の下方を通つて真西の方向に及んでいる。池の北汀は、実

測図の海拔92.25mの等高線に添つたものと推定される(第2図)。さてこれらの池庭がいつ頃からのものであるのか判然としないが、その歴史をありかえつて見ると、それは平安時代にまで遡りそうである。
〔註3〕
「一乗院文書」

永延2年(887)丁亥九月十一日一乗院御造営也
〔中略〕南面ニ紫宸殿及内裏御殿仮ニ移即倉屋殿
〔中略〕寺禁中自御造営也、此時始水屋川之流水通

也〔註4〕
〔中略〕寛治七年(1093)三月白河院行幸
先年例一乗院殿御入御、此時一乗院殿御池掘匡房
仰金輪池名給也(下略)

とある。記録は伝承に加え後世の粉飾をまぬがれな

いが、水屋川を通したことや、池庭のあつたことだけは信頼出来ると思う。そこで水屋川から水を引いて来たとなると、それは唐門の東か西かどちらからかといふことになるし、宸殿の背後に園池があつたとする。その池の形状や、水辺の勾配などを知りたいので、これらについては最近行つた電気抵抗法による復原的考察法を加味することとした。

3、電気抵抗法による池及び造水の調査

この調査は、旧一乗院庭園にかつて存在したと考えられる池、造水などの状態を発掘することなしに

地表から採取することを目的として、昭和36年10月30日より11月2日までの3日間に実施したものである。一乗院庭園は、海拔93 m前後であり、附近の地質は粘土と砂礫の互層より成る洪積層であり、調査地域内で地質学的に特記すべき個所はみられなかつた。

この測定に使用した器具は京大農学部の好意により借用させてもらつた横河電機製作所製のL型大地抵抗測定器である。

測定方法は4極法で、電極間隔0.2 mから2 m毎に3 m迄の垂直探査と、電極間隔1 mとする水平探査によつた。前者の測定地点は実測図(第2図)に示したI～VIの各個所である。

この測定に使用した器具は京大農学部の好意により借用させてもらつた横河電機製作所製のL型大地抵抗測定器である。

測定方法は4極法で、電極間隔0.2 mから2 m毎に3 m迄の垂直探査と、電極間隔1 mとする水平探査によつた。前者の測定地点は実測図(第2図)に示したI～VIの各個所である。

以下にその結果の概要を記す。

垂直探査の結果は第3図に示す通りである。

地下3 mまでは全体的に言つて水平な4層の成層構造をなしてゐる。そして地下80 cm位に水層があり、1.5 m以下は水を多く含んだ軟質粘土もしくは粘土交り砂の層と推察される。III、IVともに40 cmに低比抵抗帯があり、遺水跡と推定し等価比抵抗線図で、III附近では約120 m、IVでは約90 m以下の地帶に該当すると思われる。VIは他の場合と異なる層序をなし、池跡と推定し、その深さは約1 mであり等価比抵抗線のうち約90 m以下の区域がそれに該当すると思われる。

猶、Iについては1.5～2 mの間が水の多い粘土と推定され、しかも水平探査の結果局部的なものであるから、小さい水溜りがあつたものと思われる。

IVの地下1 m前後についても同様である。

以上の結果を実測図(第2図)上に重ねて図示し

第2図 一乗院跡実測図
曲線のうち実線は等価比抵抗線(数字は等高線)
曲線のうち実線は等価比抵抗線(数字は等高線)

第3図 一乗院構内における $\rho-a$ 曲線

ておいたので参考にされたい。
なお地質の区分並深度の判定は、参考すべき地質柱状図がなく、全く $P - a$ 曲線から解釈したものである。

三

〔註1〕 奈良ホチル南に、史跡があり、それを大乗院院跡と呼んでいたが、実は治承の乱での、東院の隣にあつた元の大乗院が焼失したので、東院跡と呼んでいた。

〔註2〕 一乘院指図には書院が2ヶ所にある。眞敬入道親王日記では南の書院又は大書院によると、北書院をその用途に従い居間と書院としている。池庭をはさんで殿殿の北にあるのは、書院又は大書院で、親しい人との対面、接待の場所である。

〔註3〕 この記録は昔のままのものでなく、或る

(註4) 古記録の写しか
判斷なのであるう
(註5) 拙稿 南都の庭園と春日野の地形と水
系化研究第42号昭和35年10月大和文
化研究会発行。
(註5) 電気比抵抗法による埋蔵遺構の調査は既
に飛鳥寺跡 法金剛院 東大寺知足院
寺極安坊、平宮宮跡の一部などで試み徐々に

成果をあげている。

京都御苑内に放ける寐殿造系庭園遺跡

間、東京極と東堀川とはさまれた区域に数多く集積してゐることは、平安時代に於ける公家の記録類によつても明らかであり、拾芥抄其他の地誌によつても知られるのである。

化して行つたにも拘らず、旧内裏、大宮御所（仙洞御所）、近衛殿、八条殿、九条殿、宮家跡などを含む京都御守は、草木地又は疎林地のままで今日に至つてゐるので、密集した住宅地やビル街などの地域とは違つて、昔ながらの地形や池跡など残る可能性性があつた。

2、後西院延寶度仙洞御所

凝花洞というのは延宝年間に於ける後西院仙洞御所の庭園の名称のことである。

旧内裏の南側の敷地は早くから「一条殿」として聞え
町田氏屏風にもその殿舎と庭が描かれている。此
地に最初仙洞御所が設けられたのは寛文3年(1663)
のことと、正月26日、寛文天皇に位をゆづつたため
幕府は内裏、明正院、後水尾院、東福門院の各御所
の造営にひきつづき、12月21日木造始、翌4年8月
8日上棟、8月21日移徙されたのがこの後西院仙洞
御所であった。そのころの敷地は東西86間余、南北
東築地74間余、最長径95間余であり、殿舎の総坪数
287坪余であった。しかしこの御所は10年程で焼失
してしまった。

寛文13年(1673)の火災後復興は、存外手間取
り、延宝3年(1675)3月27日木造始、同7月26日

の上棟、同年12月2日上棟と共に移徙が行われてい
た。

皇帝の東宮御所は寛永5年3月8日焼け、その
あとは宝永5年7月着工、6年6月21日東山天皇が
中御門天皇に譲位され新装成つたこの仙洞御所へ、
7月2日に移徙されたのである。

さてこれらの敷地の輪郭は勿論のこと各建物の配
置、内裏との関係位置などすべて宮内庁書陵部藏指
図によつて判明するのである。しかしそれにも庭園
の部分だけは図示されていない。そこで家藏凝花洞
庭園図を狙上に乗せ、検討を雇え。だと思ふ。

この図の輪郭かくは、延宝度の後西院仙洞御所に一致
するのである。しかし延宝度の後西院の指図では、
東側約3分の1を除き南北分を空白としているので
その空白の場所は庭園敷地らしく思われる。しかる
に家藏の指図にはこの南半分の東側にも建物が描か
れてゐるのである。ところが前揭の如く延宝度の
後西院仙洞御所は、後西院崩御と共に、建物の多く
は他所に移建され、一時建物敷地内が完全に空地と
なつた時期があつた。南北を半々に仕切る塀の北側

る。後西院は貞享2年(1685)2月23日崩御され、

勧修寺文書によると、この後西院御所は、翌3年5

月7日に、その主要殿舎が下賜されていることが知

られる。そこで貞享4年(1687)4月、旧内裏の東

南の空地に東宮御所を増築し、仙洞御所とするに当

つては、後西院御所に残されていた旧殿舎を移建し

てるので、それ以後宝永4年(1707)にこの地に

東宮御所が建てられるまで空地となつていた。

宝永4年(1707)10月造営の慶仁親王(東山天皇

皇太子)の東宮御所は翌宝永5年3月8日焼け、その

あとは宝永5年7月着工、6年6月21日東山天皇が

中御門天皇に譲位され新装成つたこの仙洞御所へ、

7月2日に移徙されたのである。

さてこれらの敷地の輪郭は勿論のこと各建物の配

置、内裏との関係位置などすべて宮内庁書陵部藏指

図によつて判明するのである。しかしそれにも庭園

の部分だけは図示されていない。そこで家藏凝花洞
庭園図を狙上に乗せ、検討を雇え。だと思ふ。

75即ち32.70m、旧内裏(京都御所)の西築地塀の

周辺よりの高さ約3m(海抜51.31m出雲築

方へ抜けることはあり得たであろう。

庭園指図はまさしく、このような重要な建物が一

つもなく、そして庭園の一部を東の方(建物跡地)

に拡張した状態であり、庭園の北部に御茶屋、東北

寄の中島に瓊波亭、南の中島に碧床蔵という2棟の

庭園建築と蔵座敷だけを描いたものである。

3. 凝花洞庭園の復原的考察
にあつて主要建築は勿論の

池庭の東側にあつ

た建物も他所へ移建し、そのあとに池庭を少しく東

方へ抜けることはあり得たであろう。

庭園指図はまさしく、このような重要な建物が一

つもなく、そして庭園の一部を東の方(建物跡地)

に拡張した状態であり、庭園の北部に御茶屋、東北

寄の中島に瓊波亭、南の中島に碧床蔵という2棟の

庭園建築と蔵座敷だけを描いたものである。

第4図 凝花洞築山跡(御苑内)

ここに考へられるることは、平安時代の平安京内に於ける殿造系庭園にあつては、自然の林丘をそのまま取込んだ庭園の場合は別として、池を掘り上げた土を利用して山を築く場合は、池の周辺に盛土をすることによく、大ていは中島に土を盛り上げそれを山島と呼んでいたことが作庭記の内容から判明する。また実際に平安時代初期に於ける洛中の庭園では、淳和院の池中島に墳状の飯の山があつたし

花山院にも同類のものがあつたらしい。京都近郊の庭園では、鳥羽殿秋の山があり、室町時代の実例として蓮如上人の山科南殿跡（光照寺）の中島には海拔高3.5m前後（推定水面より約6m高い）の築山が二つ並び聳えている。現在京都御苑の中に残る近衛殿の中島も築山状であり、桂離宮の場合も、築山は何れも中島上で、殊に賞花亭北方の頂上には海拔8.5m⁶、そして池の水面を抜くこと約7m以上である。即ち築山は池畔に造らず、中島上に築くところが平安時代以降所謂作庭記流庭園の伝統であるかも知れぬ。

第5図 後西院仙洞御所復原図

- （1）森蘿著「修学院離宮の復原的研究」奈良国立文化研究所学報第2冊 昭和29年9月
（2）森蘿・村岡正稿「仙洞御所の庭園について」造園雑誌第23巻第1号 昭和34年8月、日本造園学会発行。
- （3）（4）仙洞御所関係の記録や指図については、ほとんどのすべてを東京工大平井聖氏の御示教によつた。
（5）家蔵図は10数年前先輩針ヶ谷輝吉氏より贈られたものである。建物は池北の木屋と中島上の庭園建築の外は1棟も描いていない。
（6）拙稿「平安時代前期庭園の研究」建築学会大会論文集第13号 昭和14年4月 日本建築学会発行
（7）拙稿「鳥羽殿庭園考」造園雑誌第5巻第2号 昭和13年7月、日本造園学会発行。
（8）拙稿「第三鳥羽殿遺跡の調査概報」名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告 昭和34年3月、京都府教育委員会発行。
（森蘿著「中世庭園文化史」奈良国立文化財研究所学報第6冊昭和34年2月、吉川弘文館発行。
（森蘿・牛川喜幸）